審査の結果の要旨

氏名　辛　那炅

民芸運動の指導者として知られる柳宗悦（1889-1961）の研究としては、従来から、伝記的研究、宗教学的研究、近代デザインとの関係についての研究、朝鮮芸術論についての研究、あるいは経済学的ないし社会学的側面からの研究など、多くの蓄積がある。だが、柳の民芸運動を支えていた彼の美学思想それ自体を中心的主題とする研究は従来ほとんどなされてこなかった。本論文は、従来のさまざまな側面からの柳研究をふまえつつも、柳の美学理論それ自体に力点を置き、それを包括的に扱った最初の論文である。

第一章「『民芸』の誕生と民芸運動の展開過程」において、著者は民芸運動の歴史的展開を追いつつ、民芸運動とは、近代的な「個人作家」と伝統的な一般の工人との協力を通して工芸の刷新を求める近代的運動であったことを示す。第二章「民芸の美的特質と『究竟の美』」は、白樺派時代の若き柳がウィリアム・ブレイクの影響を受けつつ、それを通して西洋的な「天才」賛美から「民衆」の肯定へとその立場を変え、そこから「他力」「衆生」「不二美」などの概念を軸とする後年の仏教美学の構築へ向かったことを明らかにする。第三章「芸術と民族」は、柳の「朝鮮芸術批評」および「沖縄言語論争」を取り上げ、彼の「民族」観が当時の国家主義的なそれとは異質な「民衆」概念を前提とすること、第四章「芸術と社会の美的理想」は、この「民衆」観が柳独自の社会主義的発想に基づくことを明らかにし、柳の民芸運動を「美的生活」の理念のもとに総括する。

この論文の特質として次の三点を上げることができる。まず、著者は柳のテクストを丹念に読み解き、そのテクストのおかれていた歴史的状況に着目することで、テクストの表面的な読解からは見えてこない柳の問題関心（たとえば、柳の民芸観を支える「社会主義」への関心）を明らかにしている。第二に、柳の思想の歴史的変化に着目し、とりわけ従来の柳の朝鮮芸術観についての解釈が柳の 1920 年代の「悲哀の美」にのみ依拠していたことを指摘しつつその後の柳の朝鮮芸術観の変化を追うことにより、柳を朝鮮芸術の擁護者として一面的に賞賛する立場、およびそれとは逆に柳の芸術観を植民地主義的として一面的に断罪する立場を批判している。第三に、柳の民芸運動が単なる反近代的・保守主義的運動ではなく、むしろ近代的特質を、さらにはある種の前衛性をも備えていることを明らかにしている。こうした従来の柳像に変容を迫る解釈は、柳に肉薄しようとする著者の真摯な研究態度によるものであり、高く評価できる。テクスト解釈を通しての自らの理論の批判的構築作業になお望むべき点はあるが、400 字詰め原稿用紙換算 1100 枚を超える本論文は、留学生が五年間の博士課程在学中に執筆したということを顧慮せずとも、力作と形容しうるものであり、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値すると結論する。